E 2　　福岡市における高齢者の生活実態に関する調査　（第2報）.
―生活史に関する調査報告―

筑紫女学園短大　小川直樹

＜目的＞　課題「現代家族の機能障害の実態と紛争処理の総合的研究」への取り組みとして、まず一般的に把握されるべき生活実態の調査を試み、報告した。次の段階として、この調査分析をとおして一定数のサンプルを選び出し、丹念なボーリング調査をして、いわゆるヨコの調査とタテの調査とを交錯させて、深層にある問題の所在を明らかにすることを目的とした生活史調査を行った。

＜方法・対象＞　昭和60年7月から11月にかけて聴きとり調査を行った。ただ、対象地域については必ずしも前年調査地域に限定することはできなかった。調査ケース60ケースのうち、施設利用者を含めて38ケース63.3%は前年調査地域から選んだ。（配偶関係～有·28　無·32　性別～男·29　女·31）

調査対象者の年齢階級と居住地

年齢＼地区	福岡市	近郊・県内	兼設	佐世保市	松山市	計
65歳～96歳	9	5				14
70歳～74歳	10	2	3	4		19
75歳～79歳	6	2	1	3	1	13
80歳以上	6	2	3	3		14
計	31	11	7	10	1	60

＜結果＞　①　高齢期の「幸せ」に深いかかわりをもつ土台の一つは、経済的地盤の安定である。おおむね職業生活現役時代の職業キャリアの達成度に強く相関し、子の養育など全般の良好な家族関係と結びつきやすい。

②　高齢期のあり方は、高齢期に達するまでの生活の積み重ねに深いかかわりをもっている。生活史を通してみると、主として職業的な達成度とかかわる高齢期の「幸せ」状況の階層性が感得される。

こうした問題を制度的に、いかに補完して高齢者全般の「幸せ」を保障するかは少なくとも、今後の重要な課題の一つとなる。